

近代英国翻訳論 —— 解題と訳文 ジョン・ドライデン 後四篇

大久保友博

(京都大学大学院人間・環境学研究科博士候補生)

本稿は、17世紀後半のイギリスで活躍した桂冠詩人・作家のジョン・ドライデンによる翻訳論のうち、前三篇を扱った大久保(2012a)に引き続いて、さらに三篇の新訳と一篇の本邦初訳を試み、近代英国および翻訳史上の理解に必要な情報も併せて簡便に提供するものである。「第三雑詠集『詩ノ探究』: 献辞」「諷刺興隆考」「『アエネーイス』: 献辞」の三篇についてはすでに旧訳(佐藤1988)があるが、訳・解説ともに古く誤りも含んでいるため、以後の英文学研究と翻訳研究を踏まえての更新が必要であり、また当該書が入手閲覧困難なものとなっていることから、ここに新訳を問う意義もあるかと思われる。「『古今説話集』: 序文」についてはこれまで翻訳論として着目されることの少なかったものであるが、作家の死後翻訳に注目したものとして新たに採り上げたい。構成としては、底本テキストの検討、内容・背景についての解説、そして日本語による抄訳の順にまとめて記述する。

1. 底本テキストについて

大久保(2012a)の繰り返しになるが、旧訳および旧注釈書(佐藤1980, 1988)では、19世紀末にセインツベリが改訂した *The Works of John Dryden* (1882-1893) を高く評価して底本とするも、今となっては問題も少なくない。本稿では現在最も信頼の置けるものとして、カリフォルニア大学出版会が刊行している *The Works of John Dryden* (1956-2002) の本文を翻訳底本に採用し、旧注釈書(佐藤1980)と、「『アエネーイス』: 献辞」を除く三篇についてはロングマン刊の *The Poems of John Dryden* (1995-2005) の本文と注も参考とした。

各篇から翻訳論に当たる部分を訳出したが、それぞれの出典は以下の通りである。

「第三雑詠集『詩ノ探究』: 献辞」より

Dryden, J. (1693a/1974). Contributions to Examen Poeticum. In H. T. Swedenberg Jr. et al. (eds.) *The Works of John Dryden*, v. 4. Berkeley: University of California Press, 369.24-371.17, 372.18-27.

「諷刺興隆考」より

Dryden, J. (1693c/1974). Discourse Concerning the Original and Progress of Satire. In H. T. Swedenberg Jr. et al. (eds.) *The Works of John Dryden*, v. 4. Berkeley: University of California Press, 70.6-70.15, 87.1-89.31.

『アエネーイス』: 献辞」より

Dryden, J. (1697/1987). The Dedication of the *Æneis*. In H. T. Swedenberg Jr. *et al.* (eds.) *The Works of John Dryden*, v. 5. Berkeley: University of California Press, 320.5-320.21, 329.1-331.6, 333.23-334.33.

『古今説話集』: 序文」より

Dryden, J. (1700a/2000). Fables: Preface. In H. T. Swedenberg Jr. *et al.* (eds.) *The Works of John Dryden*, v. 7. Berkeley: University of California Press, 24(1)-24(31), 28(150)-28(159), 39(564)-40(587), 41(599)-41(606), 41(627)-42(666).

2. 内容・背景について

ジョン・ドライデンの翻訳論としては、一般的には「オウィディウス『書簡集』: 序文」(翻訳は大久保(2012a))が採り上げられ、その逐語訳(*metaphrase*)・釈意訳(*paraphrase*)・模倣(*imitation*)の三分類と、中間の釈意訳をよしとする、という意見が注目されることが多い。しかしその序文そのものは、当時は自己弁解・弁護のメディアであった通り、古くからある修辞術のひとつ「拡充法」の基本に沿って作られ、自説の対抗意見を極端に貶めることで、自説をよく見せるというものであった。その上で、肝心の自分の立場(釈意訳)については具体的な説明がほとんどなく、ドライデンの得意とする当時流行の「中庸」というレトリックをそのまま翻訳に適用したものに過ぎなかった。あくまで修辞技法である以上、良いと主張したい「真ん中」がどこにありと、両極端を意図的に作り出しさえすればよく、いかなるものにも用いるものだと言わざるを得ない。

ジェレミー・マンデイは、さらに『アエネーイス』: 献辞」のみに着目して、単にドライデンがそのあとスタンスを変えたとしているが(Munday, 2001: 25)、これは本稿収録の翻訳を見ればわかるように、不十分な言及である。むしろ、中庸の位置がそのたびごとにぶれている(収録作品の内情に合わせて、微調整されている)と言った方がいいだろう。1693年に出された古典諷刺詩の共訳集に付された「諷刺興隆考」では、「我々が採った共通の手法とは、逐字訳でなく、釈意訳の類である。あるいは釈意訳と模倣とのあいだの、なおいっそう緩やかな何かである」と述べられており(本稿3.2.参照)、中庸は模倣の側に寄っている一方で、1697年のウェルギリウス『アエネーイス』単独訳の献辞では、「総論としては、釈意訳と逐字訳という両極端のあいだを取って進むのが適切と私は考えます」とされている(3.3.参照)。

ドライデン自身の実際の訳し方がほとんど変わっていないことを考えると、その中庸の位置の変化は、もちろん「諷刺興隆考」では(翻案に近い訳し方をした)共訳者への配慮が理由のひとつに考えられるだろう。そして『アエネーイス』での変化は、ドライデン自身の変化というよりも、前後の文脈を読めばわかるように、翻訳にかけられる時間が足りず、文章を彫琢できなかったことへの言い訳と考えるのがひとまず妥当だろう。「できてしまった粗の言い訳に自分の老齢や病身を申し立てる」ことはしなかったが、時間という問題と、「英雄詩形が窮屈なばかりに、どうしても単音節語ばかりを」用いて逐字訳に近いことをするほかなかったと(3.3.参照)、翻訳技術上の問題にすり替えることで、翻訳の出来の弁解をしたとも言えよう。

ドライデンの立場や意見が総じて首尾一貫していないことは、彼を採り上げる際にはよく触れら

れるが、研究においてはそのことを念頭に置いた上で、意見が変わる外因(当時の社会的・個人的事情など)と、それでも変わらない実質的な部分を探るとというのが主流である。たとえばドライデンの翻訳論のなかでは、さらにもうひとつ意見が揺れているところがある。それは先行訳者のひとり、ジョージ・サンズの扱いだ。「第三雑詠集『詩ノ探究』: 献辞」においては、サンズの世評を引き合いに出して、逐語訳に対する評価を再考せよと述べているが、同時に自分はサンズの翻訳を少年期以来読んでいないことも吐露している。それが『古今説話集』: 序文になると、サンズは「先の時代の最高の詩人」としてその訳が褒められるのである(3.4.参照)。むしろドライデンが同じオウィディウス『転身譜』の訳者として先行訳をあらためて検証した上で意見を撤回したと考えていいだろうし、それゆえに中庸の位置が積意識と模倣のあいだから、逐語訳と積意識のあいだにずらすことを受け入れることができた、ともう一步踏み込んだ解釈をしてもいいだろう。そのときドライデンがどのような訳者と密接につきあったか、というのが変化の一因というわけである(ただしドライデンが「オウィディウス『書簡集』: 序文」の冒頭で、サンズが『転身譜』訳に付したオウィディウスの伝記に言及していることから、ドライデンが第三雑詠集の時点で本当にサンズの翻訳を読んでいなかったのか、疑わしいところも残る)。

「オウィディウス『書簡集』: 序文」ののち、翻訳の実践を重ねたドライデンは次第に序文や献辞のなかでも自分の訳出法について具体的なことを述べるようになるが、その中心的な話題は詩形と音量の問題である。前者は「第二雑詠集『杜』: 序文」および「第三雑詠集『詩ノ探究』: 献辞」で触れられる語尾母音消失の模倣についてであり、後者は「第三雑詠集『詩ノ探究』: 献辞」「諷刺興隆考」「『アエネーイス』: 献辞」に共通して現れる音節数の議論である。ラテン詩において語尾母音消失は、詩の緩急の演出とも関わりがあるため、詩の流れの再現を考えた場合に意識される事項であるが、割合技巧的に解決がしやすいものでもある。ただし音節数の議論については、ドライデン自身が述べるように、英詩(とりわけヒロイック・カプレット)とラテン詩のあいだで一行に許容される音節数に差があり、また英語における通常の音節数とラテン語表現に必要な音節数にも違いがあるため、その悩みの種となっていたようだ。

ドライデンにとって、英語はラテン語よりも劣った言語であり(これは金の時代・銀の時代・青銅の時代・鉄の時代と、時代が下るにつれて世は墮落していくという古典時代の考え方が背景にある)、その理由として彼は英語に「長たらしく嵩張り、凶体のある」ことを採り上げて、嘆いている(3.1.参照)。その解決のために平易な単音節語を用いると、語彙はいわゆる本来語のみとなって、言葉が単純化され表現とイメージが貧弱になってしまう。こういった迷い、すなわち原典の豊かな言い回しを再現すれば音節が嵩張るが、それを切り詰めれば表現が弱くなる、という逡巡は、どちらが直訳でどちらが意識か、などとは単純に決められない問題でもある。前者の場合、言葉の上では逐字になるが逐行ではなく、後者では意味の上では逐行になるが逐字ではない。そしてその結果、どちらからも離れた自由訳がひとつの解決法として現れるわけで、こうなるとドライデンが逐語訳・積意識・模倣という一軸的に並べた構図そのものに無理が出てきてしまう。

ドライデンが苦慮した翻訳の実際と、彼が提示した翻訳の図式がそもそも合致しないものなのであれば、ドライデンがそのなかで自分の位置をうまく当てはめられず、あちこちとぶれてしまうのは、ほとんど当然とも言えよう。そしてまた、ドライデンは原典よりも行数が多いことをもって意識ないし

自由訳の人物ととらえられることがあるが、これも音量の面を考えると再考の余地がある。『古今説話集』に収録されたオウィディウス『転身譜』のピュタゴラスの挿話は、原典では 484 行前後、サンズでは 514 行、ドライデンでは 720 行とされている。確かに逐行訳の観点ではサンズが近いようにも思えるが、ドライデンが「諷刺興隆考」で述べた英詩とラテン詩のあいだの平均四音節の差を考慮するならば、原典約 6800 音節に対してサンズ約 5100 音節、ドライデン約 7200 音節となって、量的概算ではドライデンの方が近いということになる (Ford (2013) のように六歩格の平均を 15 音節で換算すれば原典は約 7200 音節となりほぼ一致しさえする)。単に行数の比較からドライデンは加筆ばかりが多いと思われがちだが (そして翻訳研究でも絵画的な敷衍や政治的な追記がことさら取り上げられるが)、実際には本人の言うように音量に気を払いながらそのなかで可能な表現を模索していると思われる。

ドライデンの批評は、そのほとんどに何かしらの元ネタや典拠があると言われている。既存の説を切り貼り組み合わせ、まっとうな論に仕立て上げるというわけで、翻訳論についてもその例外ではない。ただし彼の言説に信用できる場所があるとすれば、そうした自分を立派に見せようとする文章よりも、愚痴やぼやき、あるいは純粋な楽しみを感じさせる記述に注目した方がよい。その意味では『古今説話集』: 序文は、じゅうぶん見るに値する。冒頭から語られるのは、それまであった自己弁護ではなく、翻訳が楽しくてたまらないという晩年のドライデンによる素直な気持ちの吐露である。小屋が邸宅になってしまったという比喩は、本人が「自分を抑えることができなかった」というように (3.4. 参照)、翻訳のいや増す楽しさを喩えているものでもある。そして『アエネーイス』: 献辞では、「自分の労作がおのれの死後にも残ることを望めるなら」と、翻訳をだしに自分の名声が残ることを考えていた彼が (3.3. 参照)、この序文では次のように語っている。「私が彼の作品の一部を訳したのは、ただわが同国人のあいだで彼の死後の名声を永遠のものにできないか、いや少なくとも甦らせられないかと思つてのことなのだ」 (3.4. 参照)。つまり翻訳が自己を長生きさせるものから他者を甦らせ永遠にするものへと変わっているのだ。本人が言うように、また Sherwood (1953) も言及しているように、チャーサーについてのまともな批評は、ドライデンに至るまで確かに少なかった。論評自体はフランス古典主義の考え方をチャーサーに応用したものであるが、このチャーサーについての意気込みは彼独自のものと見ていいだろう。

ドライデンがこの頃、翻訳をある種の〈甦り〉だと考えていたことは、『古今説話集』のなかで用いた“translate”という言葉の用例からも、裏付けが取れる。先述したピュタゴラスの挿話は原典では『転身譜』第 15 巻にあって、〈転身〉に〈輪廻〉を絡めて作品全体の意義を語る重要なくだりであるが、その訳文 396-397 行目では「[万物が] 転生されて、大きくなり、感覚を持ち、喋れるようになつても、／やはり死は、不死の実体には力が及ばない (Translated grow, have sense, or can discourse; / But death on deathless substance has no force.)」と、ドライデンは輪廻における不滅のものへの価値を語るところで、“translate”を転生という意味で用いているのだ。しかも、この訳文に厳密に対応する表現は原典にはなく、ドライデン自身の自由訳であるところからも、この語感が彼自身のものであることがわかる。

そして自分の死後についても、ドライデンは自分の作品が翻訳によって転生されるのでは、という想像もしている。「時代が変われば、私の書き物にも同じ無茶をやつてのける詩人が出てくるの

かもしれない。少なくとも手直しに値するだけ作品が長生きすればの話だが」という言説は(3.4.参照)、翻訳に値するものこそ長生きする、ということでもあり、また「運命のようなものがそのなかにあるのだと。いくばくかの時を経たあとでも、偉大な才人の死後の名誉名声は、チャーサーが仏英双方でそうであったように、やはり甦るものなのだ」と言うように(3.4.参照)、翻訳による甦りをある種の運命と見る彼の考え方は、現代における翻訳哲学を先取りさえしている。

他人から意見を借りて強気の文章を書いてきたドライデンからすれば、こうした自分独自の主張はやはり自信の欠けるものであって、むしろ「迷信だと非難されては敵わないので、これ以上はあえて言い立てはしないが」と最後に添えるのは(3.4.参照)、かえってこの説が彼の個人的意見であるという側面を強くする。生涯に 38500 行もの訳詩をものしたドライデンは、その遺作となった個人翻訳集の序文によく、自分なりの翻訳論を残せたのである。

3. 訳文

3.1. 「第三雑詠集『詩ノ探究』: 献辞」より

[...]つつしんで本雑詠集のわが労作を閣下にお捧げします。同時に、献呈者たる私のみならず榮譽を独り占めさせませぬよう、私とともにこの仕事に参じた他の者らの作品についても。それ以上は出過ぎた真似となりますから致しませんが。奥方様ならびに貴方様は、光栄な事にわがオウィディウス翻訳の私自身による朗読をご静聴下さいました。お二方ともご不興ということはなかったかと存じます。そう思えたのは末の子に対する老人の欲目のごときものなのかも知れませんが、今訳は手がけたなかでもわが全力の精粹だと思われるのです。おそらくこの詩人[オウィディウス]は近頃取り組んでいた他の作家らよりも訳しやすく、またおそらくはわが才分次第ではもっと。ローマの才人でも誰より読者に親しまれやすいのは確かで、なかには彼以上にお高くとまった者たちもいれば、説教臭い者も、またしかつめらしい者もいるわけです。この人物、一流の者たちと並ぶに足るだけの学識は持ち合わせておりました。ですが詩行がすらすら出てきたため、それを手直しするという不断の努力を怠ったのです。想像力と表現力の両面においては溢れんばかりのことがたびたび。しかし近年目されているように、いつも自然だとは限りません。軽妙な言葉遣いということであれば、過ぎるくらいにあります。ただし適切な言葉遣いならルクレーティウスやホラーティウス、何よりもウェルギリウスの方が上手です。この人物についてはすでに、その『ヒロインたちの書簡集』につけたわが序文で散々申し述べておりますから、ここであえて補足することは今更ございません。自分のことを申し上げれば、この翻訳ではできる限りこの人物の特徴を写し取ろうと努めました。おそらくは本人の欠点まで写すという差し出がましいことまでも。チャップマン氏はそのホメーロスの翻訳で、積意的にやったのは確固たる意図をもってのことだ、とはっきり述べています。優れた詩人はそのやり方で訳されるべき、というのがその意見なのです。そこで示された根拠こそ覚えておりませんが、つまりは詩人の美点を何か落としてしまうのでは、と恐れてのことだと私は思うのです。それが欠点だとしても、逐字かつ周密な翻訳というもう一方の極端に走る輩のそれよりはるかに許せるものです。その場合、詩人は相手たる著者の言葉にきつく縛られてしまうため、その気品ある言葉を表現しようにもゆとりが足りないことになります。当人は相手を漠としたまま、そして当人は相手を詩行と見たのに、相手を散文にさせておくのです。ゆえにまた、かくも絶賛されたサンズに尽くされた

オウィディウスにしても同様なのです。これはあくまで彼の翻訳の印象として私に残っているものにすぎません。というのも少年時代以来、彼[サンズ訳]を読んだことがないのですから。先達らが彼を誉めたとして、疑いもせずそのまま彼を受け入れる輩は、再度読み返して自分なりの判断を下せばよいのです。(もし原典がわかるのなら)彼の訳本でオウィディウスの詩がどうなっているのか、すべてでないにしてもその大部分が蒸発していないか、確かめればよいのです。やはりこれは彼の生きた時代の誤断から出たものです。この者たちは優れた詩行を知ってもいなければ愛してもいませんでした。この者たちはなるほど学者でしたが銜学者なのでした。この者たちがわざわざ学をひけらかした当然の報いとして、その翻訳はどれも英語に訳さなければわからないものになっています。

私も自画自賛するつもりはありませんし、友人連中も私にお世辞を言うことはありませんが、それでも私はわが著者の想念を大半は示せております。時に誤っているとしても、いかなる人にもよくあることです。必ずしもオランダの注釈者に従っていないことも、総じて連中を見かけ倒しの知識人と断じておられる方には許して頂きましょう。連中は相手たるなまくら詩人につや出しするくらいがせいぜいなのですが、連中の機知に諷刺で追い打ちをかけることは、もっと良い機会に取っておきましょう、連中に私が敬愛を抱いていることを示すためにも。さらに私はオウィディウスを、その元来ある甘美・気品・流麗を復元しようとしています。わが詩にある種の律動を、そしていわゆる詩行の勢いを原典と同じように、英語がラテン語についてゆける限り、授けようとしているのです。この人物が語尾母音消失をほとんど使わないように、私もできるだけそれを避けるよう努めました。加えて、この人物に彼独特の言い回しをさせるようにしました、言葉の上でも考え方の上でも。私がこの人物を写すということですから、なかでも私に言えないことは真似できません。他の者が同じだけ努力してもやはりそうでしょう。ところがそういうものこそ、この詩人の素晴らしく雅なところなのです。[...]

私もくたびれてしまいましたし、印刷屋からもこの献辞を早く送れと催促されています。ですがそうせずにここでもうひとつ、わが英国詩人に日々犯されている過ちについて事立てましょう。それは注意深くあれば改められるものなのかもしれませんが。なぜなれば畢竟、我らが言語は長たらしく嵩張り、図体のあるものなので、切り詰めてもっと諧調にできるはずなのです。この鉄の時代において世の機運がかけているために、我らは我らが国語の改良を進めるにはあまりにほど遠いところにいるために、数年後には近隣国のように野蛮な話し方・書き方をすることにもなりかねません。[...]

3.2. 「諷刺興隆考」より

[...]

さてその学識ある評者バーテン・ホリデイについてだが、そのユウェナリスの解釈解説こそ秀でているものの、その訳詩と英語は同等程度に詰屈で散々なものであった。なぜなれば詩人の真意を我々に示すだけでは不十分で、確かにこの人物が大変忠実に完遂したことは私も認めるが、この人物はまた、英語が原典の高雅についてゆける限りは、相手の才分や韻律も模倣すべきだったのだ。つまるところ詩人だけが詩人を訳すのである。ホリデイとステイプルトン、ユウェナリス

に取り組んだ際、この思案が足りなかった。だが文句はこの程度にしておこう。ただ失礼ながら私が留意したいのは、ホリデイ曰く、延々嗤えば、ホラーティウスしかり、人を改めるところか怒らせてしまうものなのだ、という金言である。卑しい諷刺にあるホラーティウスの流儀に、その人物を易々と引き渡してしまうわけには私はいかないのだ。ユウェナーリスの控えめなところには、その新奇の諷刺を必ずしも適用させずに、そしてその人物に好きなだけ鋭い洒落を詠じさせておければ、やはり見事な冗談が、諷刺最上の精妙な筆致にこもるのである。そういえば閣下、これは貴殿一流の才分で、ユウェナーリスさえたどり着けなかったもの。この見事なものを生み出し得るのは、著者の読解でも模倣でもない。生得のものに相違なく、天分からでてくるものに違はなく、とりわけもの考え方は教えられるものではない。ゆえに後天的な持ち主には模倣できないのだ。[...]

単独訳であったならばこの翻訳の出来の言い訳もできよう。とはいえ大部分ではないものの幸いこの仕事を完遂してくれた紳士数人の手並みは実に優れている。その秀でているところをもって、どうか私やわが息子らの不手際を埋め合わせて頂きたい。自ら我のものならぬ諷刺詩をあれこれ閲読したが、これまで見てきた英詩のどれよりも、完璧な諷刺詩であると私には思える。我々が採った共通の手法とは、逐字訳でなく、釈意の類である。あるいは釈意と模倣とのあいだの、なおいっそう緩やかな何かである。それ以外の方法で満足ゆくものにするのは、我々いやいかなる人にも無理であった。今回の著者一同の想念を正確にほぼ逐行で訳すことが我らの務めであるなら、我々が手を出さずとも、すでにバーテン・ホリデイが成し遂げてくれている。そしてその学識ある注釈と解説を助けとすれば、ユウェナーリスやペルシウスのみならず、いっそう漠としたもの、すなわち本人の詩行でさえも理解できようものだ。

だがそやつは名誉のために筆を執り、学者へ向けて書いたのである。我らはただ、学者でないが無学でもない紳士淑女の娯楽のために著述する。分別良識あれども原典に明るくない、ないしは少なくともそれを論じうるほどにはラテン詩を自家のものとしていない人々であれば、我らの二大著者が世界での名声評判に見合う人物であるかどうかはわかるだけでも喜ばれよう。だからこそ我らは公衆に、この仕事で最大限あらゆる満足を与えんと努めている。

しかるに、先達ホリデイとステイピルトンほど著者に忠実では必ずしもないにしても、我らは読者諸氏へはるかに勝る喜びを授けたという賞賛を頂戴してもよかろう。我らは、連中がなしたように一歩ごとではないにしても、いっそう大きな幅で著者を迎ってきた。なぜなれば、連中はしばしば近くに迫るあまりユウェナーリスとペルシウスの踵を踏んだばかりか、近寄りすぎて怪我をさせたのである。名著者も翻訳者に度を過ぎた近さで付きまとわれては敵わない。相手の肉体を捕まえんとすると、我らは相手の精神を逸してしまうのだ。雑味ばかりが手元に残るも、何か高度な表現や何か言葉ないし思想の精妙な言い回しの中にあつたはずの魂も飛散してしまう。したがってこの手法を選び取ったホリデイは、ユウェナーリスの意味をつかみこそすれ、その詩情は当人から逃げてしまうのが常であった。

楽しみこそ詩情の目指すひとつとする私を認めもせず、教訓という唯一の目的を遂げる手段としか見ない輩も、やはり楽しみという手立てがなければ教訓も無味乾燥な哲学に過ぎない、ということは認めざるをえないだろう。道徳という生薬なら詩人よりもアリストテレスやエピクテートスからの方が、まだ得るものがあるろうか。ホリデイもステイピルトンも、ユウェナーリスをその詩的な部分、

その語法・話術では模倣しなかったのである。当時もまた同様にその以前においても詩人でなかったのであるから、彼らの取った手法では詩情溢れるところの成功はどのみち無理であった。

いわゆる英雄詩という英語詩はわずか十音節からなっている。一方でラテン詩の六歩格^{ヘクサメトリス}は時に十七音節までふくれあがる。たとえばウェルギリウスのこの詩行、

Pulverulenta putrem sonitu quatit ungula Campum.

ここでは英詩とラテン詩のあいだに一行で七音節もの差がある。さてこの歩格の平均値は約十四音節である。なぜなれば六歩格では長長より長短短の方が多く用いられる詩脚だからだ。

しかしホリデイは書く際、毎行四音節減るという不都合を気に留めることなく、その詩の一行でユウェナーリスの一行の想念をみな持たせようと齷齪しているのだ。成否は陳述のごまかしにかかっている。この人物はその詩行に響きの悪い単音節語を押し詰め^{せぎ}にせざるを得なかったが、それを大量に都合し得たのは、我らが野蛮な国語のおかげだ。その結果、この人物は逐字訳すべきという学術的目標へと辿り着いたのだ。その詩行はその内に詩なるものは何もなく、あるとすればただ最悪のものとしての押韻だけである。しかもそれは優良からはほど遠い。どころかさらに耐えがたいのが、この人物がよりにもよって響きのよくない単音節語をぎゅうぎゅう詰め^{せぎ}にしてしまったため、説こうとしているはずの想念が、著者のもの以上に漠となっていることだ。そうなれば、ホリデイの訳そのものも、その著者についてなしたものと同程度に大部な注がなければ到底わかるものでないだろう。ここで私の訳の話をすれば、彼の注がなくともユウェナーリスの意味を何とか理解することができるが、彼の翻訳はその著者以上に難しい。私のものでは、自らの骨折りが報われるくらいにはラテン詩の美しさが見当たるのだが、ホリデイやステイピルトンのものでは、まずもって私の耳が死にそうなほど不快になる。そして次にはその想念がひどくややこしいため、原点に立ち戻ると途端にわかりやすくなって、その分楽しい仕事になるのだ。

我々の翻訳について断っておきたいのは、たとえユウェナーリスの全想念を示していないにしても、その大部分は届けているということだ。そして総じてわかりやすく伝えてもいるので、少しの注もなくとも十分、我らの訳はわかりよくなっている。我々は著者に少なくとも詩の衣をまわさせている。実際、以前の英訳よりも響きよく雅なものにしている。さらに著者が英国に生まれ当世に対して書いていればきつと物語っていた類いの英語を物語らせようと努めてきた。もし時に我らの中に(ごくまれに)ローマのものでなくむしろ我々が生まれ育った国の習わしや仕来りを相手に言わせたものがあるとしたら、それは彼我の習わしに何らかの類似があった場合か、もしくは自国人の理解を容易にするため我々になじみのある仕来りを相手に取らせた場合である。私はこの工夫を正しいと主張するつもりはないが、一言断っておけばそれで十分であろう。なぜなれば、率直に言って、複数の民や時代の仕来りを混同することなどまずないからだ。我々はそうしたことを英国風^{英風}にしておくか、ローマ風^{ローマ風}にしておくか、どちらか決めねばならない。正しいと言い張るのも、断っておくものいけないとすれば、少なくともここは理解はできるというところでどうかお目こぼし願いたい。はるかにわかりやすくなっているのは、その分あえて過ちが犯されているからで、何かしら読者を楽しませようと思つてのことなのだ。

[...]

3.3. 『アエネーイス』: 献辞より

[...]

ウェルギリウスは自作『アエネーイス』に十一年を要しましたが、自覚しつつも未完成のまま残すことになりました。このことをしっかり念頭に置きますと、私が彼の作品の翻訳に費やした三年どころか、さらにもう四年、自らの誤りを正すためにどうか頂けましたなら、わが訳本は今以上に少しなりともましなものにできたと存じます。というのも詩人は、自分の労作がおのれの死後にも残ることを望めるなら、おのれの読者にどれだけ媚びを売っても売りすぎることはないのですから。とはいえできてしまった粗の言い訳に自分の老齢や病身を申し立てるつもりはございません。ただ時間が足りなかったとこれだけは申し述べておきます。というのも予約購読者の幾人かが盛んに苦情を入れてくるため、もはやこれ以上は出版延期ができなくなったのです。閣下の率直なお心とたびたび下さった親切にお縋りしまして、粗がそこまで多くなければ、ホラーティウスに免じてお許し願えればと存じます。

詩に多くの輝きあらば、我は多少の
汚れには不快にならず、そは不注意の産物、
人ならば避けがたきものなれば。

[...]

私は久しく前から考えていたのですが、最高の目利きをも満足させる方法とは、詩人を逐字に訳すことではありません。というのも本人特有の美が言葉の選別にあるとして、そのせつかくの美から私[英訳者]が門前払いされてしまうのを防ごうとすれば、我らの英雄詩形が窮屈なばかりに、どうしても単音節語ばかりを使うしか、子音の張り付いたそれを使うしかないのです。単音節語など我らの母国語の重荷となっているというのに。正直に申し上げて、まれに起こることではありますが、単音節詩が諧調よく響くこともあり得ます。実例もいくつか見たことがございます。『アエネーイス』の拙訳第一行目は耳障りではありません。

Arms, and the Man I Sing, who forc'd by Fate, &c.
[武器と男を私は歌う、運命に突き動かされた男を——]

ですがはるかによい例が、学識分別ある我らのクリーチ氏の英訳になるマーニールウス最終行から得られます。

Nor could the World have born so fierce a Flame.
[ましてや世はしかる猛火に堪え得ず]

ここでは流音の子音がいくつも巧みに置かれ、みな一音節であるのに言葉に心地よい響きを与えられています。

確かに私も時には今作品のほかの箇所でもやむなく用いてきましたが、けして好きでやったわけではありません。事を急いでいたか、もしくはウェルギリウスが言葉を飾る隙を与えてくれなかったからなのです。そもそも単音節からなる一行というのは大抵、韻文を散文に転じさせてしまうもので、その散文にしても耳障りで響きが悪いのです。そういえばフィラルクスがバルザックのことを、二十もの単音節語を、ひとつの二音節語も挟まずに並べ立てたと咎めておりました。私の採用している方法は、逐語訳ほど周密ではありませんが、釈意訳ほど緩慢でもありません。省いたものもいくつかあれば、自分の手で加えたところもあります。とはいえ省いたといってもやむを得ない場合のみで、英語にしても雅でないものに過ぎないと考えております。書き足す方にしてもまた、ウェルギリウスの想念からたやすく引き出せるものと考えております。それらは(少なくともそう考えてよいと自負しておりますが)相手に押しつけたものではなく、相手から生まれたものだと思います。この詩人は余人よりも簡潔に勉める人物ですが、小空間に大量を容れられるという言語上の強みがありました。我々含めあらゆる現代語には冠詞・代名詞が多く、その上、時制や格の印など、父祖の過ちで言葉の基礎となってしまった雑味がほかにも色々あります。ローマ人はその言葉の礎をギリシア語としました。そしてご存じの通り、ギリシア人はその言語を完成に至らせるまで何百年と苦心しました。彼らはこうした印をみな拒み、省ける限りの冠詞をみな切り捨てました。我々には二語で表すしかないものを、一語に込めるのです。それこそ、我々が彼ほど簡潔には書けない一因であります。たとえば〈Pater [πατήρ]〉という語は、あるひとりの父を意味するだけでなく、あなたの父、私の父、彼彼女の父もみなこの一語に含まれているわけです。

この不便はあらゆる現代語に共通するもので、もっぱらこれがために我々は、古代人が要した以上の言葉を費やすことを余儀なくされています。しかし前述したように、ウェルギリウスは短くかつ雅たらんと努めているところでは、私は優雅を追い求め、簡潔は捨てることとしています。というのも、そこでの彼は竜涎香、すなわち芳香のようなものですが、本体がきめ細かで粘着性となれば、麝香や霊猫香なる劣った香で開かねばならず、そうでなくては甘美は多言語へ引き込めないでしょう。

総論としては、釈意訳と逐字訳という両極端のあいだを取って進むのが適切と私は考えます。それは、その優美、彼の言葉の美にある最も秀でたものを失うことなく、できるだけ著者に寄り添うためなのです。そして言い添えねばなりません、そうした言葉は必ず比喩的なのです。そうしたものでも、我らの言葉でも雅が保てそうなものについては、私も頑張って移植しようとしてみましたが、その大半はやむなく失われてしまいます。というのも自国語以外ではどこでも映えようがないものだからです。ウェルギリウスは時にそうしたものを一行のうちにふたつ使うことがありますが、我らの英雄詩の窮屈な詩形では、ひとつ以上受け入れることなど不可能です。それでいて何もなければの数の埋め合わせもせねばなりません。これこそ言語の相違、これこそ言葉の選別技術が私に足りない所以。それでも僭越ながら言わせて頂きたいのは、あのフランスの訳者と同じ理由から希望するのですが、この聖なる著者からあらゆる要素をものにして、もし英国かつこの当世に生まれていたら自ら物語ったはずの英語を、私はウェルギリウスに語らせようと努めたということなの

です。スグレ同様、私はこの取り組みが自分の思惑通りにはうまくいかなかったと認めます。ただある程度までは彼の文体の明晰なところ、純粋なところ、品あるところ、壮大なところを写し取っていると認められるなら、私もまったく褒めるところなしというわけでもないでしょう。しかしこの主題についてはまたあとで、序文の終わるまでに語る機会がありましょう。

[...]

自身の弁護のためにも閣下に申し上げねばならぬことがもうひとつございます。それは『農耕詩』第一巻冒頭から『アエネーイス』最終巻末尾まで、気づけば巻を追うごとに翻訳の難しさが自分のなかで募っていったのです。というのも、ウェルギリウスはあらゆる詩人のなかでも、比喩的で雅で響きよい言葉を、こう申してもよければほとんど無尽蔵なほど備えていたからです。その才分のほんの一部しか受け継いでおらず、さらにラテン語よりはるかに劣る言語で書いている私には、同じ想念にまた出くわしては、語句に変化をつけるのが大変難儀に感じられました。本人にしても、やむを得ずか好き好んでなのか、同じ事を同じ言葉で表すこともしばしばですし、前に用いた二、三の詩行をまるまる繰り返すことも頻々です。言葉は貨幣のごとく容易く造れるものではありません。それどころか入金ほぼなく出金が嵩むと、銀行だけでなく公庫の信用まで損なわれます。ウェルギリウスは毎行何かしらの新語を私に求めました。そして長々と支払い続けたため、私は破産寸前となりました。後者の本の末尾では、否応なく冒頭や中盤以上の負担となります。当然の帰結として、『アエネーイス』第十二巻は、一卷二巻の二倍の時間がかかりました。もしウェルギリウスがもう一卷私に課していたら、私はどうなっておりましたか。確かに私は、縁に溝の入った新硬貨が足りなくなり、古い鍛造硬貨をもって大衆に支払いをする羽目に陥りました。つまり前に用いたのと同じ古い言葉を使ったのです。そして受け取る側にしても、手に入るものがそもそも些少の場合には、どんなものでも仕方なく受け取るほかないというわけです。

この(私が苦闘の末に何とか乗り越えた)難点のほかにも、いかなる翻訳者にも克服できないことがもうひとつ残っております。相対する著者の想念に縛られているということです。とはいえすでに述べたように多少のあそびもあるわけです(なぜなら微々たるものでも加減すれば破門の罰を受けねばならぬ、というほど不可侵なものではないと思われるからです)。ですが我々はあくまで奴隷、他人の農園で働いております。我々は葡萄園を耕しますが、そのワインは所有者のもの。土壌が時に不毛となれば、きっと我々は鞭打たれます。実りよいものとなり、世話がうまくいったとしても、我々は感謝もされません。というのも、きっとお高くとまった読者は、卑しい雑役が自分の務めを果たした、と言うばかりだからです。ともあれこれはここでとどめておきましょう。相手の想念をわかるようにする義務があるため、その意味を読者へ伝えられるよう、我々は仕方なく自分なりの詩行を調子外れにするわけです。物事を新たに見出す人こそ、その思想・言葉の主人です。その人物はそれこそ諧調よいものにできるまで、好きなように、それを変えたり改めたりできます。ですがみじめな翻訳者にはそのような権限はありません。思想に縛られているため、既存の表現内で最大限の妙音を作らねばなりません。そしてこの理由から、必ずしも原典ほど甘美にできるとは限らないわけです。[...]

3.4. 『古今説話集』:序文』より

詩人とは、当初の経費計算も頭のなかでは正確な建築設計士のようなもの。だが計画全体を見れば、その総額も間違いで、はじめ予定していた費用では足りない計算になってしまう。作品が進むにつれ心変わりし、開始時には考えていなかった設備案があれこれ出てきてしまうからだ。というのがまさに私に起こったことである。私は邸宅を建ててしまった。小屋だけのつもりであったのに。ただ、さる貴族よりはまだうまくやった方である。その人は当初は犬小屋だったのに果ては宮殿を目論んでついに存命中には完成しなかったのだ。

ホメーロス『イーリアス』第一巻を訳したあと(作品全体に対する試訳のつもりだった)、私はオウィディウス『転身譜』第十二巻の翻訳に進んだ。なぜならその中には、ほかの事物のあいだに、トロイア戦争の原因、始まり、終わりが含まれているからだ。ここでやめた方が賢明であったのに、我が道の先にあつたのはアイアースとオデュッセウスの話、自分を抑えることはできなかった。これを達成すると、私は第十五巻の前半部(『転身譜』全体のなかでも傑作)に夢中になるあまり、私はそれを英訳するという楽しい仕事を満喫したのだった。そしてそこで、私は訳した詩行を総計して、それがささやかな本になるほどたまってきたことに気づいたのである。そのことが、相対していた著者の以前の巻にある優れたいくつかの箇所を顧みる契機ともなった。そこで私の頭に浮かんだのが、イノシシ狩り、キニュラスとミュラー、そしてバキウスとピレーモーンの心温まる話などで、私はこうした話を十分厳密に訳し、原典の有していたのと同じ詩語を与えられたと思う。そして厚かましく言ってもよければ、これはいかなる詩人にもある才能ではない。これに最も近くまで辿り着いたのが、かの天才学識あるサンズであり、先の時代の最高の詩人である。もしその名称をもっと適切に言えば、この終わらんとする世紀の前半部、ということになるだろうか。 [...]

わが翻訳の第一、ホメーロス『イーリアス』第一巻に話の糸を戻そう。もしわが長命息災が天主にとって喜ばしいことであるなら、わが望みは『イーリアス』全巻の翻訳である。仮にまだ大衆からこのことへの励ましを受けられるなら、いくらか元気な気持ちにもなってわが仕事に着手できようものだ。きっと前もって現世の見通しを立てようというのも、取り組んでみたことでウェルギリウスよりホメーロスの方が楽しい作業だと気づけたおかげである(とはいえ翻訳の労が少なくなるとも言えないのだろう)。なぜなら、私の才分には、かのラテン詩人よりも、このギリシア人の方が合っているのだから。 [...]

[...]ありていに言えば、チョーサーはダイヤモンドの原石で、磨かないと輝かないものに違いないのだ。おそらくはさらに、詩の黎明期に生きた彼は、いつも首尾一貫したものを書いたわけではなく、時に大事なもののなかにつまらないことどもを混ぜ込む。頻繁ではないにせよまた時にはオウィディウスのようにむやみやたらに喋って、言葉の加減を知らない。だがチョーサー同様、気まぐれが溢れるのを欠点として、それが不自然なものになっている大才人は大勢いる。著者は書けることをすべてでなく、必要なことだけを書くべきなのだ。私はチョーサーの冗長さを鑑みて(凡才の人間が天才の欠点を見つけるのは容易いことなので)、自分を逐字訳に縛ることはせず、不要に思えるところ、重みが足りずにうまく思いが空回りしているように見えるところは、省くこともよくあった。数箇所ではさらに出しゃばって、わが著者に欠陥があると思えたところ、我らの言語にそもそも言葉が足りず彼の発想に本当の輝きを与えられないと思えたところでは、自分の手で何かしら付け足

すこともした。そしてこれにいつそう大胆になったのも、(自分から言うのが許されるなら)自分には彼と同気質の魂があり、同じ学芸に精通していると気づいたからなおさらのことなのだ。時代が変われば、私の書き物にも同じ無茶をやってのける詩人が出てくるのかもしれない。少なくとも手直しに値するだけ作品が長生きすればの話だが。また印刷のミスで失われたり損なわれたりしたチョーサーの想念の復元を要することも時にはあった。[...]

しかし正反対の観点から、私がチョーサーを英語に訳すべきでないとする評者もいる。その者たちは、彼の古い言語を根拠として何らかの尊重すべきところがあるとし、そしてそれを変えるのは冒瀆かつ蹂躪にほかならないと考えるのだ。その者たちは意見を推し進め、彼の優れた想念の何かしらがこの移注によって損なわれ、その思想の美の多くが確実に失われるのだと、それはその古い衣でこそはるかに優美に現れるのだと言う。[...]あらゆる移注で、すなわちあらゆる翻訳で何かが失われるに違いないことは、私も認めるところだ。だが想念は残るのだ。そうしなければほとんどが、ほんのわずかな人にしか理解できなくなって失われたはずの、いや少なくとも損なわれたはずの想念が。今、チョーサーを完全に理解できるほど読める人間が、いかに少ないかわかるだろうか。それさえ不完全なら、得るものも少なくなり楽しみもなくなる。確かに彼のことをこうして私が骨折ったところで、サクソンに馴染みある数人の役には立たない。しかし必要がないなら私の訳本を無視してくれればいい。わかる言葉に詩情や想念が注ぎ込まれさえすれば、その者たちと同じほどその想念も詩情もわかってくれる、そんな人々のためにそれを作ったのだ。さらに踏み込んで、私の失っただけの美をみなあえて付け足した箇所もあるし、元々なかったものを与えた箇所もあるだろう。だがここで自分の肩を持つのは当たり前だ。読者に判断してもらおう。そうすれば私もその裁決に従う。ただ私にも彼らに文句を言う筋合いはあると思う。彼らはチョーサーを理解しているというだけで、同国人の大半からその益を奪い、独り占めしている。まるで守銭奴が祖母の金をひとり眺めるためだけにそうするがごとく。要するに、私が真剣に訴えたいのは、これまでチョーサーに大きな敬意を払った人物は私以上にいなかった、いるはずがない、ということなのだ。私が彼の作品の一部を訳したのは、ただわが同国人のあいだで彼の死後の名声を永遠のものにできないかと、いや少なくとも甦らせられないかと思っただけのことなのだ。もし私がどこかしらをよりよいものに変えたとしても、同時に私はそもそも彼がいなければ何もできないことを認めなければならない。『すでに発見されたものに何か付け足すのは容易い』のだから、大きく褒められたことでもない。とはいえ私がもう少し大きなものを受け取ってもいいと思うのは、そこまでの虚栄ではないはずだ。最後に彼についてこれだけは言いたいということを、一言添えておきたい。わが友人たるさる貴婦人は、フランスの女流作家とも親しい付き合いがあるのだが、その人が友から教えられたところでは、ド・スキュデリー嬢という、巫女と同年齢で巫女同様に詩神から靈感を拝するご婦人が、今まさにこのときも、チョーサーを現代フランス語に訳している最中なのだという。私の知り得たところでは、確かに彼はかつて古プロヴァンス語に訳されたことがあった(というのも、彼女がどれだけ古英語を理解できるものか私にはわからないからだ)。しかしその事実が本当なら、そこから私はこう考える。運命のようなものがそのなかにあるのだと。いくばくかの時を経たあとでも、偉大な才人の死後の名誉名声は、チョーサーが仏英双方でそうであったように、やはり甦るものなのだ。これがまったくの偶然なら、それこそ異常なことだ。迷信だと非難されては敵わないので、これ以上はあえて言い立

てはしないが。

[...]

.....

【著者紹介】

大久保友博(OKUBO Tomohiro) 京都大学大学院人間・環境学研究科博士候補生、大阪市立大学・同志社大学・龍谷大学ほか非常勤講師。翻訳理論・英国翻訳論史専攻。〈大久保ゆう〉名義にて文芸・美術書等の翻訳に携わる。連絡先: holmes@alz.jp

.....

【参考文献】

- Allen, R. J. (1933/1967). *The Clubs of Augustan London*. Hamden: Archon Books.
- Amos, F. R. (1920/1973). *Early Theories of Translation*. New York: Octagon Books.
- Barnard, J. (2004). Dryden and Patronage. In S. N. Zwicker (ed.) *The Cambridge Companion to John Dryden*. Cambridge: Cambridge University Press, 199-220.
- Bassnett, S. (2002). *Translation Studies: Third Edition*. London: Routledge.
- Battestin, M. C. (1974). *The Providence of Wit: Aspects of Form in Augustan Literature and the Arts*. Oxford: Clarendon Press.
- Bredvold, L. I. (1934/1959). *The Intellectual Milieu of John Dryden: Studies in Some Aspects of Seventeenth-Century Thought*. Ann Arbor: The University of Michigan Press.
- Brower, R. (1974). *Mirror on Mirror: Translation, Imitation, Parody*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Brown, C. S. (1973). John Dryden as Comparatist. *Comparative Literature Studies*, 10(2): 112-124.
- Caldwell, T. (1996). Honey and Venom: Dryden's Third Georgic. *Eighteenth-Century Life*, 20(3): 20-36.
- Caldwell, T. (2004). Dryden and Denham. *Texas Studies in Literature & Language*, 46(1): 49-72.
- Caldwell, T. (2011). 'Sacred Bonds of Amity': Dryden and Male Friendship. *University of Toronto Quarterly*, 80(1): 24-48.
- Collins, A. S. (1927). *Authorship in the Days of Johnson: Being a Study of the Relation Between Author, Patron, Publisher, and Public, 1726-1780*. London: Holden.
- Craig, H. (1921). Dryden's Lucian. *Classical Philology*, 16(2): 141-163.
- Crown, B. (2005). *The Social Life of Coffee: The Emergence of the British Coffeehouse*. New Haven: Yale University Press.
- Cummings, R. & S. Gillespie (2009). Translations from Greek and Latin Classics 1550-1700: A Revised Bibliography. *Translation and Literature*, 18(1): 1-42.
- Davis, P. (1999). 'Dogmatical' Dryden: Translating the Georgics in the Age of Politeness. *Translation and Literature*, 8(1): 28-53.
- Davis, P. (2001). 'But Slaves We Are': Dryden and Virgil, Translation and the 'Gyant Race'. *Translation*

- and Literature*, 10(1): 110-127.
- Davis, P. (2004). Dryden and the Invention of Augustan Culture. *The Cambridge Companion to John Dryden*. Cambridge: Cambridge University Press, 75-91.
- Davis, P. (2008). *Translation and the Poet's Life: the Ethics of Translating in English Culture, 1646-1726*. Oxford: Oxford University Press.
- D'Addario, Ch. (2004). Dryden and the Historiography of Exile: Milton and Virgil in Dryden's Late Period. *The Huntington Library Quarterly*, 67(4): 553-572.
- D'Addario, Ch. (2007). *Exile and Journey in Seventeenth-Century Literature*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Dryden, J. (1680a/1956). Preface to Ovid's Epistles. In H. T. Swedenberg Jr. *et al.* (eds.) *The Works of John Dryden*, v. 1. Berkeley: University of California Press, 109-119
- Dryden, J. (1680b/1995). Preface to Ovid's Epistles. *The Poems of John Dryden*, v. 1. London: Longman, 376-391.
- Dryden, J. (1685a/1969). Preface to Sylvæ. In H. T. Swedenberg Jr. *et al.* (eds.) *The Works of John Dryden*, v. 3. Berkeley: University of California Press, 3-18.
- Dryden, J. (1685b/1995). Preface to Sylvae. *The Poems of John Dryden*, v. 2. London: Longman, 234-257.
- Dryden, J. (1693a/1974). Contributions to Examen Poeticum. In H. T. Swedenberg Jr. *et al.* (eds.) *The Works of John Dryden*, v. 4. Berkeley: University of California Press, 363-375.
- Dryden, J. (1693b/2000). Dedication to Examen Poeticum. In Paul Hammond & David Hopkins (eds.) *The Poems of John Dryden*, v. 4. London: Longman, 203-228.
- Dryden, J. (1693c/1974). Discourse Concerning the Original and Progress of Satire. In H. T. Swedenberg Jr. *et al.* (eds.) *The Works of John Dryden*, v. 4. Berkeley: University of California Press, 3-90.
- Dryden, J. (1693d/2000). Discourse Concerning Satire. In P. Hammond & D. Hopkins (eds.) *The Poems of John Dryden*, v. 3. London: Longman, 302-450.
- Dryden, J. (1696/1989). Life of Lucian. In H. T. Swedenberg Jr. *et al.* (eds.) *The Works of John Dryden*, v. 20. Berkeley: University of California Press, 208-227.
- Dryden, J. (1697/1987). The Dedication of the Æneis. In H. T. Swedenberg Jr. *et al.* (eds.) *The Works of John Dryden*, v. 5. Berkeley: University of California Press, 267-341.
- Dryden, J. (1700a/2000). Fables: Preface. In H. T. Swedenberg Jr. *et al.* (eds.) *The Works of John Dryden*, v. 7. Berkeley: University of California Press, 24-47.
- Dryden, J. (1700b/2005). Dedication and Preface to Fables Ancient and Modern. In P. Hammond & D. Hopkins (eds.) *The Poems of John Dryden*, v. 5. London: Longman, 33-90.
- Engetsu, K. (2004). Dryden and the Modes of Restoration Sociability. In S. N. Zwicker (ed.) *The Cambridge Companion to John Dryden*. Cambridge: Cambridge University Press, 181-196.
- Ford, P. (2013). *The Judgment of Palaemon: the Contest Between Neo-Latin and Vernacular Poetry in*

- Renaissance France*. Leiden: Brill.
- Frost, W. (1955/1969). *Dryden and the Art of Translation*. Hamden: Archon Books.
- Frost, W. (1974). Dryden's Versions of Ovid. *Comparative Literature*, 26(3): 193-202.
- Frost, W. (1984). Dryden's Virgil. *Comparative Literature*, 36(3): 193-208.
- Frost, W. (1988). *John Dryden: Dramatist, Satirist, Translator*. New York: AMS Press.
- Fujimura, T. H. (1983). Dryden's Virgil: Translation as Autobiography. *Studies in Philology*, 80(1): 67-83.
- Geduld, H. M. (1969). *Prince of Publishers: A Study of the Work and Career of Jacob Tonson*. Bloomington: Indiana University Press.
- Gillespie, S. (1988). The Early Years of the Dryden-Tonson Partnership: The Background to Their Composite Translations and Miscellanies of the 1680s. *Restoration*, 12: 10-19.
- Gillespie, S. (2009). Translations from Greek and Latin Classics, Part 2: 1701-1800: A Revised Bibliography. *Translation and Literature*, 18(2): 181-224.
- Gillespie, S. (2011). *English Translation and Classical Reception: Towards a New Literary History*. Chichester: Wiley-Blackwell.
- Gillespie, S. & R. Sowerby. (2005). Translation and Literary Innovation. In S. Gillespie & D. Hopkins (eds.) *The Oxford History of Literary Translation in English*, v. 3. Oxford: Oxford University Press, 21-37.
- Gillespie, S. & P. Wilson. (2005). The Publishing and Readership of Translation. In S. Gillespie & D. Hopkins (eds.) *The Oxford History of Literary Translation in English*, v. 3. Oxford: Oxford University Press, 38-51.
- Hagstrum, J. H. (1958). *The Sister Arts: The Tradition of Literary Pictorialism and English Poetry from Dryden to Gray*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Hammond, P. (1999). *Dryden and the Traces of Classical Rome*. Oxford: Oxford University Press.
- Hammond, P. (2004). Dryden, John. In C. Matthew & B. Harrison (eds.) *Oxford Dictionary of National Biography*, v. 16. Oxford: Oxford University Press, 1018-1027.
- Hammond P. & D. Hopkins. (ed.) (2000). *John Dryden: Tercentenary Essays*. Oxford: Oxford University Press.
- Hopkins, D. (1986). *John Dryden*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Hopkins, D. (1988). Dryden and Ovid's 'Wit out of Season'. In C. Martindale (ed.) *Ovid Renewed: Ovidian Influences on Literature and Art from the Middle Ages to the Twentieth Century*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Hopkins, D. (2000a). Classical Translation and Imitation. In D. Womersley (ed.) *A Companion to Literature from Milton to Blake*. Oxford: Blackwell, 76-93.
- Hopkins, D. (2000b). John Dryden, Fables. In D. Womersley (ed.) *A Companion to Literature from Milton to Blake*. Oxford: Blackwell, 232-237.
- Hopkins, D. (2005). Dryden and His Contemporaries. In S. Gillespie & D. Hopkins (eds.) *The Oxford*

- History of Literary Translation in English*, v. 3. Oxford: Oxford University Press, 55-66.
- Hopkins, D. & P. Rogers. (2005). The Translator's Trade. In S. Gillespie & D. Hopkins (eds.) *The Oxford History of Literary Translation in English*, v. 3. Oxford: Oxford University Press, 81-95.
- Johns, A. (1998). *The Nature of the Book: Print and Knowledge in the Making*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Kelly, L. (1979). *The True Interpreter: A History of Translation Theory and Practice in the West*. New York: St. Martin's Press.
- Kelly, L. (2005). The Eighteenth Century to Tytler. In S. Gillespie & D. Hopkins (eds.) *The Oxford History of Literary Translation in English*, v. 3. Oxford: Oxford University Press, 67-78.
- Knights, M. (2005). *Representation and Misrepresentation in Later Stuart Britain*. Oxford: Oxford University Press.
- Lipking, L. (1970). *The Ordering of the Arts: In Eighteenth-Century England*. Princeton: Princeton University Press.
- Lord, G. de F., et al. (eds.) (1963-1975). *Poems on Affairs of State: Augustan Satirical Verse, 1660-1714*, 7 vols. New Haven: Yale University Press.
- Lynch, K. M. (1971). *Jacob Tonson: Kit-Cat Publisher*. Knoxville: The University of Tennessee Press.
- Matthew, C. & B. Harrison (eds.) (2004). *Oxford Dictionary of National Biography*, 60 vols. Oxford: Oxford University Press.
- Miner, E. (1967). *Dryden's Poetry*. Bloomington: Indiana University Press.
- Miner, E. (1971). *The Cavalier Mode from Jonson to Cotton*. Princeton: Princeton University Press.
- Miner, E. (ed.) (1972). *John Dryden (Writers and Their Background)*. London: G. Bell.
- Munday, J. (2001). *Introducing Translation Studies: Theories and Applications*. London: Routledge.
- O'Sullivan Jr., M. J. (1980). Dryden's Theory of Translation. *Neophilologus*, 64(1): 144-159.
- Reiner, F. M. (1989). *Interpretatio: Language and Translation from Cicero to Tytler*. Amsterdam: Rodopi.
- Reverand II, C. D. (1976). Ut Pictura Poesis, and Pope's "Satire II, i". *Eighteenth-Century Studies*, 9 (4): 553-568.
- Reverand II, C. D. (1988). *Dryden's Final Poetic Mode: The Fables*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- Saunders, J. W. (1964). *The Profession of English Letters*. London: Routledge.
- Schilling, B. N. (ed.) (1963). *Dryden: A Collection of Critical Essays*. Englewood Cliffs: Prentice-Hall.
- Shagan, E. H. (2011). *The Rule of Moderation: Violence, Religion and the Politics of Restraint in Early Modern England*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Sherbo, A. (1985a). Dryden as a Cambridge Editor. *Studies in Bibliography*, 38: 252-262.
- Sherbo, A. (1985b). Dryden's Translation of Virgil's Eclogues and the Tradition. *Studies in Bibliography*, 38: 263-276.
- Sherwood, J. C. (1953). Dryden and the Rules: The Preface to the Fables. *The Journal of English and*

- Germanic Philology*, 52(1): 13-26.
- Sloman, J. (1985). *Dryden: The Poetics of Translation*. Toronto: University of Toronto Press.
- Smith, F. S. (1930). *The Classics in Translation: An Annotated Guide to the Best Translations of the Greek and Latin Classics into English*. London: Charles Scribner's Son.
- Smith, L. P. (1924). *Four Words: Romantic, Originality, Creative, Genius*. Oxford: Clarendon Press.
- Sowerby, R. (2001). Augustan Dryden. *Translation and Literature*, 10(1): 51-66.
- Sowerby, R. (2006). *The Augustan Art of Poetry: Augustan Translation of the Classics*. Oxford: Oxford University Press.
- Steiner, G. (1975/1998). *After Babel: Aspects of Language and Translation*, 3rd ed. Oxford: Oxford University Press.
- Steiner, T. R. (1970). Precursors to Dryden: English and French Theories of Translation in the Seventeenth Century. *Comparative Literature Studies*, 7(1): 50-81.
- Steiner, T. R. (1975). *English Translation Theory, 1650-1800*. Amsterdam: Van Gorcum.
- Tissol, G. (2004). Dryden's Additions and the Interpretive Reception of Ovid. *Translation and Literature*, 13(2): 181-193.
- Trickett, R. (1967). *The Honest Muse: A Study in Augustan Verse*. Oxford: Clarendon Press.
- Tytler, A. F. (1813/1978). *Essay on the Principles of Translation*. Amsterdam: John Benjamins.
- Venuti, L. (2008). *The Translator's Invisibility: A History of Translation*, 2nd ed. New York: Routledge.
- Weinbrot, H. (1966). Translation and Parody: Towards the Genealogy of the Augustan Imitation. *ELH*, 33(4): 434-447.
- West, M. (1972). Dryden's Ambivalence as a Translator of Heroic Themes. *Huntington Library Quarterly*, 36(4): 347-366.
- Winn, J. A. (1987). *John Dryden and His World*. New Haven: Yale University Press.
- Winn, J. A. (1992). *"When Beauty Fires the Blood": Love and the Arts in the Age of Dryden*. Ann Arbor: University of Michigan Press.
- Zwicker, S. N. (ed.) (1998). *The Cambridge Companion to English Literature 1650-1740*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 北垣宗治(1955)「詩の翻訳について——ドライデンの場合——」『主流』18: 47-58. 同志社英文学会
- 大久保友博(2010)「翻訳における一軸的批評の解体」日本通訳翻訳学会第11回年次大会口頭発表
- 大久保友博(2011a)「ジョン・デナムの翻訳論——〈作品〉への予感」『歴史文化社会論講座紀要』8: 49-68. 京都大学大学院人間・環境学研究科歴史文化社会論講座
- 大久保友博(2011b)「ジョージ・スタイナーと翻訳の現象学」日本通訳翻訳学会関西支部第27回例会口頭発表
- 大久保友博(2011c)「私訳: George Steiner's *After Babel*」日本通訳翻訳学会関西支部第27回例会配布ハンドアウト
- 大久保友博(2011d)「近代英国翻訳論——解題と訳文 ジョン・デナム 二篇」『翻訳研究への招待』6: 17-31. 日本通訳翻訳学会翻訳研究育成プロジェクト

- 大久保友博(2012a)「近代英国翻訳論——解題と訳文 ジョン・ドライデン 前三篇」『翻訳研究への招待』7: 107-124. 日本通訳翻訳学会翻訳研究育成プロジェクト
- 大久保友博(2012b)「ロスコモン伯と翻訳アカデミー」『関西英文学研究』6(2012): 13-20. 日本英文学会関西支部
- 大久保友博(2013a)「近代英国翻訳論——解題と訳文 キャサリン・フィリップス 書簡集(抄)」『翻訳研究への招待』9: 129-140. 日本通訳翻訳学会翻訳研究育成プロジェクト
- 大久保友博(2013b)「George Sandys: 旅は訳詩とともに」17世紀英文学会関西支部第191回例会口頭発表
- 大久保友博(2013c)「近代英国翻訳論——解題と訳文 ロスコモン伯ウエントワース・ディロン『訳詩論』(抄)」『翻訳研究への招待』10: 65-82. 日本通訳翻訳学会翻訳研究育成プロジェクト
- 大久保友博(2014a)『『転身譜』第15巻跋詞の訳におけるジョージ・サンズの変容』『歴史文化社会論講座紀要』11: 55-65. 京都大学大学院人間・環境学研究科歴史文化社会論講座
- 大久保友博(2014b)「近代英国翻訳論——解題と訳文 ホラーティウス『詩論』(抄)とその受容」『翻訳研究への招待』11: 35-44. 日本通訳翻訳学会翻訳研究育成プロジェクト
- 大久保友博(2014c)「近代英国翻訳論——解題と訳文 トマス・フランクリン『翻訳:あるひとつの詩』」『翻訳研究への招待』12: 155-172. 日本通訳翻訳学会翻訳研究育成プロジェクト
- 大久保友博(2015)「Opening to Everyone: From Wycliffite's Bible to the Authorized Version」『歴史文化社会論講座紀要』12: 43-62. 京都大学大学院人間・環境学研究科歴史文化社会論講座
- 佐藤勇夫(1980)『ジョン・ドライデンの翻訳理論』北星堂書店
- 佐藤勇夫(1981)『坪内逍遙におけるドライデン受容の研究——東洋と西洋における比較文学の原点』北星堂書店
- 佐藤勇夫(編訳)(1988)『ドライデンと周辺詩人の翻訳論』ニューカレントインターナショナル

